
過去の親友 現在の敵

叶星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去の親友 現在の敵

【Nコード】

N0351F

【作者名】

叶星

【あらすじ】

昔仲がよかった真天^{まてん}、亜天^{あてん}にある悲劇が降りかかる。

『真天^{まてん}はさ、結構堅いんだよ。だから、防御戦になっちゃうんだよ』
『あんただって、亜天^{あてん}だって、防御苦手だろ？』
『ふふっ、でもね。防御だけじゃあ、殺せないでしょ？そうしたら、自分が傷つくだけだよ』

昔の、稽古中。

仲睦まじく、語り合う真天と亜天が居た。
肩を組むことも、笑みを交わすことも無いけれど、真剣そうに語り合っていた。

何時も片時も離れずに居たから、2人は「双子」とまで言われた。
其れ位、仲がよかった。
幼く、詳しいことが分からない2人だったが、亜天はいつも冷酷なように感じてしまった。

時々いつものふざけた目ではなくて、凍りついた目をしていた。
真天は其れが何時も怖かった。

「真天殿っっ！至急、ここへ当たれと・・・！」
「ん？何処何処・・・あ、分かった」

真天は、部下が持っていた紙を見た。
その一瞬に顔が凍りつくような表情をし始めた。

そこにはいつもの命令が書かれていた。

ある場所で、実験に失敗。正気を失ったものを抹殺せよ

抹殺、と言う言葉に真天はやや驚いた。

今までは殺せという命令は何一つ無く、捕獲程度のものだったからだ。

「殺せ・・・な」

真天は、一気に駆け出した。

『俺達、いつまでも一緒にいような』
『ああ・・・そうだな』

耳に微かな思い出が廻る。

今まで幸せで、まだ何も知らないあの頃の淡い思い出。
亜天、と心の中で呼んだ。

「お前は、今、何処にいるんだ？」

問い掛けは、そっと空に消えた。

そこは、古びた実験室だった。

真天は、その扉を蹴り飛ばすように開けた。

部下と真天の予想絶する景色が目の前に広がった。

血の匂い。

転がっている死体。

貪り合う狂人。

「これ・・・が・・・実験・・・室」

部下が、小さく呟き、後ずさった。

しかし真天は、部下を振り払い、白刃で斬り付けて行く。

墓蛙が潰れるような音が、何度も聞こえた。

怖い。

怖い。

「亜天ッ！」

その名を呼んだとき、ふらりとよたつきながら、前に通る人が現れた。

真天は、びくんと打たれたように固まった。

呼んだか？・・・オレの・・・名・・・ヲ・・・

聞いたことの無い低く、おぞましい声。

過去のあの声とはかけ離れ、姿形さえも変わり果てていた。

真天は、ごくりと息を飲み、刃を振りかざす。

亜天は、目を瞑り、手を広げた。

まるでその姿は、斬ってくれ、と言わんばかりだった。

真天・・・俺ハ、才前ノ手ニ力カッテ死ネルノ力・・・

「ああっ、亜天ッッ！」

『真天^{まてん}はさ、結構堅いんだよ。だから、防御戦になっちゃうんだよ』

『あんただって、亜天^{あてん}だって、防御苦手だろ？』

『ふふっ、でもね。防御だけじゃあ、殺せないでしょ？そうしたら、自分が傷つくだけだよ』

『別に良いだろ。ほっとけ』

『ほっとけないの。俺は、真天に傷ついて欲しくないんだ』

過去の思い出が脳裏に浮かぶ。

真天は声を殺し、亜天に蹲った。

『真天……』

斬った刹那、己の名を呼んだ亜天を想いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0351f/>

過去の親友 現在の敵

2010年12月13日20時55分発行